

下層化する女性たち

—労働と家庭からの排除と貧困—



■ 小杉 礼子
宮本 みち子 編著
■ 草思書房
■ 2015年初版
■ 2,500円(税別)

第3次産業化の進展や価格競争の激化により、企業は人件費抑制のため、生活の安定した正社員を減らし、不安定・低賃金の非正規労働者を増やした。同時に、経済的理由等により結婚しない女性が増え、また一度結婚しても離婚し、中には実家からも孤立した女性が増えている。経済的貧困、そして労働からの排除、家庭からの排除は、多くの女性にどのような問題を引き起こし、解決のために、どのような対策が求められているのか。

日本型生活保障の特質は、人々に公共事業等により働く場を提供し、一家の暮らしを保障する「雇用レジーム」にあった。社会保障制度にしても、年金や医療、雇用保険が中心で、家族支援は極めて弱い。こうした状況で生活基盤が脆弱になり、経済社会の周辺部に追いやりられ、社会的ネットワークや社会参加の機会を喪失し、さらには政治的権利や発言の機会を失った女性が増えている。

本書は12人の社会学者や哲学者、民間支援団体の社会活動家が学術シンポジウムを開き、発表内容をまとめ、執筆したものである。それだけに研究内容がわかりやすく紹介されているが、それだけでは

なく、現代の日本が抱える「女性の貧困と社会的排除」といった人間の尊厳に関わる本質的問題が抉り出され、読者は具体的な対策の実行を迫られる。本書は8つの章と3つのコラムから構成される。第I部は労働と家族からの排除の現状と課題について述べる。第II部は女性ホームレスや貧困化する女性の実態を取り上げ、第III部は貧困化する女性の支援活動団体から見た実態と支援の取り組みについて紹介する。

樋口 美雄(慶應義塾大学商学部教授)

社会的排除

何らかの理由により、個人、または集団が社会から排除され、孤立している状態を示す。欧州の貧困問題を分析する際、使われるようになった用語で、「貧困」が経済的所得の不足を意味するのに対して、その主たる要因である失業について調べるうちに人種差別や言語能力、健康や技能の不足が大きく影響しており、社会の構成員として本来受け取ることのできる公共のサービスを受けられず、社会から孤立している状況が明らかにされた。「貧困」の概念に比べ、「社会的排除」はそこ至る動的なプロセスに力点が置かれ、この解明により幅広い防止策を検討できるとして使われるようになった。「社会的包摶」は反対の用語。



■ 吉良 智子 著
■ 平凡社
■ 2015年初版
■ 840円(税別)

女性画家たちの戦争

第二次世界大戦中、数多くの戦争画が制作された。しかし、そのほとんどは男性によるもので、女性画家が戦争画を残していることはあまり知られていない。本書は、女性でありながら油絵を描くという、当時の社会通念からは逸脱した制作活動により幾多の困難にも立たされていた三岸節子や桂ゆきなどの女性画家たちが、戦時下をどう生き、戦争画となぜ関わったのかを説明していく、興味深い。

戦争画は戦意高揚を目的とし、軍部による強制のもと、画家たちは抗えず描かされたと、私たちの多くは思い込んでいる。しかし、必ずしもそれが現実ではないことは、多くの洋画家たちが自ら戦地へと赴いたことが物語っている。背景には、当時の社会における美術の占める位置への危機感があった。とりわけ女性画家たちは、差別的な社会制度や規範に苦しんだ末に、そこからの脱出の機会を戦争に見出した側面もあったようだ。

戦争は軍需工場や農業漁業の現場へ女性を進出させ、いわば女性の社会参加を余儀なくさせた。しかし、女性のなかには市川房枝など女性知識人たちのように、戦争を女性の地位向上の機会と捉え、政府に協力した女性もいるといわれている。ま

してや、画材が提供されるとあっては、「女流美術家奉公隊」への参加は、女性画家にとってはある種の充足感をもたらすものであったであろうと推測されている。

戦争は突然やってくるのではない。無自覚な行為が、気がついた時には取り返しのつかない結果を生む。本書は常に状況を見極める大切さを警鐘している。

ほりお まさこ
堀尾 真紀子 (文化学園大学教授)

女流美術家奉公隊

1943年陸軍報道部の指導のもと、女性美術家約50名によって結成された国家への勤労奉仕団体。委員長に洋画家長谷川春子、役員には三岸節子を配し、他に文展、国画会、二科会、独立美術等各美術団体の会友以上が参加した。戦場の少年兵を各自が描いた「戦う少年兵」展の各地巡回で、少年兵を送り出す母親の士気高揚に大きな役割を果たした。

また、奉公隊の女性画家たちが共同制作した2部構成の大作で、記念碑的な作品に、「大東亜戦皇國婦女皆勵之図」がある。当時の新聞、雑誌の切抜き写真で構成され、1944年東京都美術館で開かれた第3回陸軍美術展に出品された。

ルポ 生殖ビジネス

—世界で「出産」はどう商品化されているか—



■ 日比野 由利 著
■ 朝日新聞出版
■ 2015年初版
■ 1,300円(税別)

本書は、商業的代理出産が実施されてきたインド、タイ、マレーシア、フィリピン、ベトナム等の国々をめぐった著者が、その成果をルポルタージュの形でまとめた1冊である。序章を読めば、訪問国のあらましを概観でき、第1章からは、インド、タイを中心として詳細な論述が始まる。著者は、生殖技術のグローバルな規制を考える前に、ローカルな文脈での意味を探ることが先決だと指摘している。そんな著者の視点を体現した一冊であり、著者とともに世界の商業的代理出産の現場をまわっているかのような緊張感と躍動感を味わえるだろう。

旅を終えた著者は、他人のための妊娠出産経験について、先進国には一定の蓄積があるが、それがインドやタイの代理母たちと共有されていないと指摘する。代理出産経験者たちが国際的に手を携え、まずは直接性交渉による代理出産や不当な契約がなくなることを期待したい。

本書では、最後に日本の問題にも触れている。未

だに生殖補助医療の法規制がない日本に、米国から同性愛者向けの代理出産サービスが上陸し、今月、東京で説明会が行われた。日本というローカルな文脈において、それが何を意味することなのか、この本とともに考えてみたい。

むとう かおり
武藤 香織
(東京大学医学研究所公共政策研究分野教授)

代理出産

他人のために妊娠出産をする行為で、体外受精型(依頼者の受精卵を代理母の子宮に移植する方法)、人工授精型(代理母の腹内に依頼者男性の精子を注入し、代理母の卵子と受精させる方法)、直接性交渉型(依頼者男性と代理母が性交渉する方法)に分けられる。米国の一州やインドのように、代理母が報酬を得る商業契約を認める国もあるが、英国のように商業契約を無効とし、代理母が無償か実費のみを得る代理出産を認める国もある。日本では法規制がなく、日本産婦人科学会が禁止しているが、親族を利用した事例が報告されている。



■ リンダ・ハーン
■ スターン・ナイランド 著
■ 文・絵
■ アンドレア・ゲルマー
■ 真野 豊 訳
■ ポット出版
■ 2015年初版
■ 1,500円(税別)

王さまと王さま

この絵本の主役は、ある国の王子さま。女王がいつもでも独身で王さまになろうとしない息子に業を煮やし、結婚相手を探すところからこの物語ははじまる。女王は世界中のお姫さまを城に呼ぶが、王子は誰もしっくりこない。いよいよ最後の候補者が兄と一緒にやって来た。そこで王子はついに胸をときめかせる。お姫さまの兄であるもう一人の王子に…。

お姫さまと王子さまが結ばれるストーリーは数あれど、本書は王子さまと王子さまが結ばれるお話だ。私が好きなのは、王子と王子の結婚をみんながごく自然に祝福するシーンだ。当たり前とされてきた恋愛觀・結婚觀を揺さぶる痛快さがあり、「同性を好きになっても、おかしくないよ」「そのまでいいんだよ」というメッセージが伝わってくる。

渋谷区と世田谷区が同性パートナーへの公的書類を発行する施策をはじめことなどを機に、注目を集めているLGBT(性的マイノリティ)の存在。世界で初めて同性結婚法を導入したオランダで生まれた

この絵本は、9言語に翻訳され世界中で読まれているという。当事者であろうとなからうと、自己肯定を深め、世界には多様な人々がいることを知るきっかけとなるはずだ。

こいわ ローマ (NPO法人Rainbow Soup代表)

LGBT

レズビアン(Lesbian: 女性同性愛者)、ゲイ(Gay: 男性同性愛者)、バイセクシュアル(Bisexual: 両性愛者)、トランスジェンダー(Transgender: 性別越境者)の頭文字をとった、性的マイノリティの総称の一つ。民間企業の調査によると、人口のおよそ13人に1人がLGBTであるといわれている。トランスジェンダーの一部に、性同一性障害の診断を受けて性別移行を行なう人がいる。近年、自治体や企業におけるLGBT施策が広がりを見せており、自民党が党内組織を設置するなど、重要な人権課題としてクローズアップされている。